

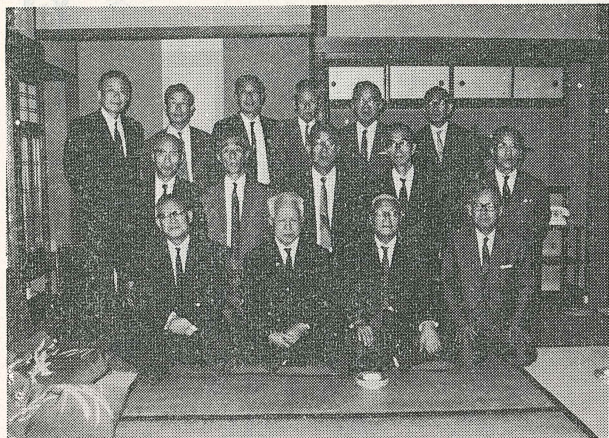
となる塩飽諸島を眺めて十年先、十五年先の未来図を予想したりする。鷺羽山から宇野へ

錦浦湾と称する児島の海岸伝いに宇野へ至り、兼て申し込んであった鳴滝ガーデンに着く。此のレストランは私の倉敷の知友三宅氏の経営であるが、戦前は天城の旧家星島家（星島二郎氏実家）の別荘で奇岩怪石の谷間を利用しての風雅な建物であるが日没で観賞し得なかった。夕食後歓談の時を過ぎ、一同は宇野駅より乗車し家路につかれました。

一日の行楽であったが誠に有意義で皆さんに喜んで頂けたようで良かったと思えました。終りに私は倉敷で酸素溶材商を営む事二十三年になります。倉敷が出身地ではありませんが自分の郷里と思つて居ます。戦後縁あって此の地へ参り酸素屋と言ふ小さな仕事を始めて応召前の大阪の綿業関係の仕事とは余り隔りがあり過ぎて戸惑つたりしましたが兎角自分の仕事だと言う喜びと、苦しみを二十何年やって来ました。零細企業が小企業に進んだと言う位の事でありませぬ。其して先輩と得意先と従業員に感謝して居ります。

午鈴会オン・パレード

大正七年戊午の歳 今から数えて五十三年前の事である。第一次大戦景気に湧く日本の国内で、わけても海外貿易は花形中の花形産業である。その王座に君臨する合名会社鈴木商店へ見習員（ぼんさん）が三月、四月、七月と三回に渉つて七十名余りが採用されて入店した。中学商業出、大学高商出の数もこの年が



最高であった。今や当時の大卒が七十五六才中卒が七十二才、そしてぼんさんの我々すら白髪と禿頭の六十七八才になった。云うまでもないがよりすぐりの秀才で容貌普通以上と云うのが採用条件の一つであったが、凡そ現在の憎々しい頑固面からは想像もできない好少年揃いであった。先づ左記の写真を見て頂こう。これは入店二年後の夏柳田済美寮で

杉村 芳孝	藤内 金次	宮永 勉
小倉 五郎	北 保	柳田 義一
高岡 芳馬	木畑龍治郎	宇津木亥一
三木 秀介	宮脇 弘吉	武井 一郎
堀内 宏展	広井 亀吉	
橋本賀一郎		

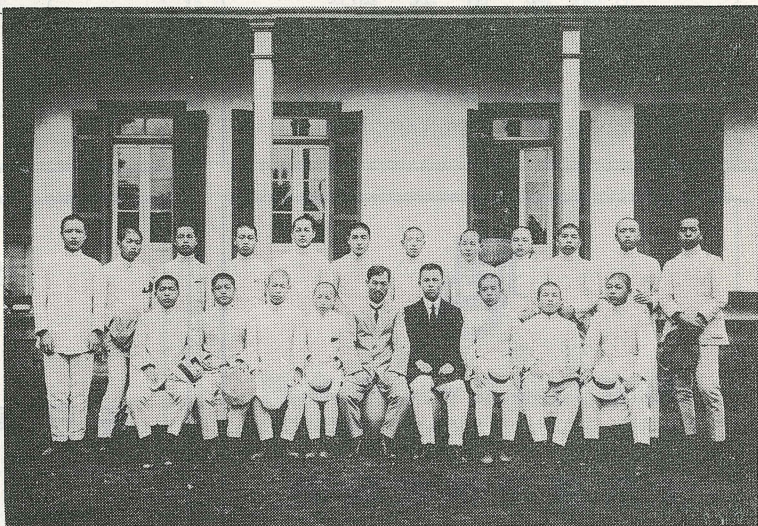
撮った物で、この時には同時入店の約半数以上が既に支店出張所へ散つて居る。この他に七月入店組の一部がオリビヤに居てこれには写つて居ない。この頃から我々はYBC（柳田野球部）や午歳に因んで午鈴会と自称し、本店の中の色々のクラブ活動に活躍した。鈴木商店末期に最も大きな集団を組み最も多面に活動したのは午鈴会の面々であろう。そして解散後も最も親密なグループを継続して来たのも午鈴会である。第二次大戦の空白から中断して居た会合が、辰巳会の発会以来隠然として三々伍々よりを戻して来たが遂に一つの懸案となり、大多数の発起人が盛り上がり上がつて、おくれればせやら五月二十九日やっと再発会の実現にこぎつけた。大鈴会、東鈴会、日長会等、同じ部会が盛んにやって居るのにたまりかねて起ち上つたものの様である。発会して見ると仲々豪華なものである。何しろ他の部会の様に長幼序列がない、皆同期の様である。どんぐりの脊くらべでのっけから我が俺が厚釜しい事おびただしい。東京其の他は欠席を承知の上で案内を出して見たら福岡から広井亀吉君が上阪して来たのにはびっくりした。

（次頁二段目へ）

羅漢夕照

柳田義一

斧の深き睡り十方雪解くる
水取りや路次は早寝の灯を洩らす
尺取りの青さ測られ四月馬鹿
遍路腰をあげて海が再び鳴る
児の昼寝を醒ます力なきオルゴール
許されぬまゝの同棲蛙が吊られてる
髭伸ばす羅漢夕照の霧を吸う
風鈴細く鳴る路次の風筋かいて
啞蟬が黙殺の手段選びたり
シヤボン玉天壁に潰れ弾くなり
弛む心をさゝえて締める夏の帯
流灯に泪をもためぬ魚介かな
迎え火を焚く大文字闇の中
束の間の焔きに花火翔けのぼる
田の水を盗めば螢火まつわらる



〔入社当時の記念写真〕

- | | |
|--------------------|----------------------|
| 木畑龍治郎
(保険部) | 田庭伊太郎
綾部 寿二(三原) |
| 広井 亀吉
(工事部) | 杉村 芳孝(竹村)
(硬化油本部) |
| 斎藤 安松
(信書部) | 宇津木亥一
(教育係) |
| 美濃島顯治(中安)
(麦粉部) | 高橋 行次
(教育係) |
| 浜中 四郎
(鉄材部) | 難波 寿一
(ビール部) |
| 宇野 寛
(会計部) | 高田 繁治
(機械部) |
| 中元 長治
(米部) | 横山 猛
(信書部) |
| 染本 博
(糧部) | 井上 満
(塩業部) |
| 溝口 孝次
(造船部) | |
| 橋本賀一郎(植野)
(砂糖部) | |
| 小松 喜一
(機寸部) | |

（前頁下段より）
全く五十年振りの再会である。「お前、何時の間にそんなに禿げたんかい」「いやあ年取ったのう、これでは道で逢うても分らんわい」。当り前である。彼とは半世紀を経て居る。リーダー格の堀内が南から年増芸妓を二人おして来たが、「こんな見事な同窓会は見た事がない、一騎

当千ばかりでとても事ついて行けない」と悲鳴を挙げて居る。宇津木さんと柳田はんは別格、宇津木さんは当時の教育係で午鈴会にはづっと一緒、柳田はんは「当時の家主や、わしを呼ばんと云う法はなからう：：」と云われると頭が上らない。誰かが異口同音に「親しい者が寄り合うとはこんなにもよいものか、我々

は矢張り兄弟の連りだ」と叫ぶ。病気で来られない内藤孝次君と美濃島顯治君の二人に送る可く寄せ書をす。杉村芳孝君が手なれた操作で盛んにフラッシュを焚いて呉れる。秋には辰巳会があるからそれを中にして年末に又寄ろうと云う事で解散。福岡の広井君は職業柄御手のもの飛行便で帰って行く。当日の出席者左の通り

出席者 橋本賀一郎、堀内宏展、武井一郎、藤内金次、高岡芳馬、小倉五郎、北 保、木畑龍治郎、宮永勉、宮脇弘吉、三木秀介、杉村芳孝、宇津木亥一、柳田義一、広井亀吉、他に欠席者在阪神四名 在東京五名
〔文責 木畑龍治郎〕